

## 英語にとって「リズム読み」とは何か

竜ヶ崎第一高等学校 寺田義弘

### 1. はじめに

ウィキペディアによれば、

英語は『**強勢リズム**』をもつ言語で、強勢のある音節が時間的にほぼ等間隔に繰り返される。簡単に言うと、第1ストレスから次の第1ストレスまでの時間的長さが等しいということである。ストレスのある1つの音節とストレスのないいくつかの音節がまとまってフットを構成していて、各フットの長さは音節数が増加しても変わることなく同じで、フット内部で音節の長さが『**調節**』される

とあります。この「調整」というのが俗にいう「音の化学変化」であり「省略」や「結合」のことだろうと思われます。個々の音が変わられるということですから、英語にとっては個々の発音よりも文の強勢リズムの方が重要ということです。

日本語の場合はどうかという、同じくウィキペディアによれば

音節ではなくモーラが基本的な単位となっており、さらに2モーラを基本的なまとまりとする1フットが日本語のリズムや語形成と密接に関連している。

とあります。また、

日本語ではリズムを1フットに整えるため、1モーラの音が2モーラ分に引き延ばされる場合もある。たとえば風呂の中で数字を読み上げるとき、「1・2・3・4・5・6・7・8・9・10」を「イチ・ニー・サン・シー・ゴー・ロク・シチ・ハチ・キュー・ジュー」と発音する。このとき、本来の2(ニ)、4(シ)、5(ゴ)は1モーラ、他の数字はすべて2モーラ=1フットとなる。そこで、2・4・5についても引き延ばして1フットに揃える。また、曜日「月火水木金土」を読み上げるときも「火」「土」は「か」「ど」であるが、他の2モーラ1フットに合わせて「かー」「どー」と引き延ばして発音される。「ポケットモンスター」を「ポケモン」、「木村拓哉」を「キムタク」と略する事例ではいずれも2フットに揃えられている。

とあります。つまり日本語は2モーラ単位でリズムを形成するという言わば『**モーラ・リズム**』ということになります。実際に自分で発話してみ

ると、例えば「友人にあった」は、「ゆう・じん・に・あつ・たー」と2モーラ単位で確かに発話している気がしますので極めて面白い事実だと思いました。いずれにせよ、英語と日本語とはリズムの作り方が全く異なるわけです。

ちなみにモーラの数え方は、撥音(「ん」、促音(「っ」、そして長母音と二重母音の第二要素は、一つのモーラらしいです。以下のような例が挙げられていました。

「サル」(猿)は、「サ」「ル」=2モーラである(2音節)。

「かっぱ」(河童)は、「カ」「ッ」「パ」=3モーラである(2音節)。

「チョコレート」は、「チョ」「コ」「レ」「ー」「ト」=5モーラである(4音節)。

話を英語のリズムに戻しますが、寺島(2000)では英語のリズムの原則として5つを以下のように簡単にまとめています。いずれも生徒に指導するという念頭に置き、特に1から3番目の指導の重要性を強調しています。

1つ目の原則は、「**一つの強音節から、次の音節までは、その間の弱音節の長さに関わらず、ほぼ同じ時間で読まなければならない**」というものです。この点は冒頭で紹介したウィキペディアの説明と同じです。寺島は例も挙げて紹介しています。

Dógs / éat / bónes.

The dógs /éat / bónes.

The dógs / will éat /bónes.

The dógs /will éat / the bónes.

The dógs / will have éat-en the bónes.

これらは下の文にいくにつれて、文の長さが長くなっていますが、文強勢の数は等しいので、いずれの行もほぼ同じ時間内で読まなければならない。従って、必然的に一番下の文では、“will have”や“-en the”は早く、不明瞭に発音されます。

2つ目は、「**文全体のリズム(文強勢)が、個々の語の強勢(語強勢)に優先する。特に強勢のある音節が続いて出るのを避ける傾向がある。**」という原則です。たとえば、“a good picture”では、“good”と“picture”に強勢がありますが、“a

véry good picture”になると、“good” にアクセントは置かれず、“véry”と“picture”にアクセントが置かれるというようなことです。

そして2つ目の原則を説明する前に次の第3の原則を説明する必要があると言います。すなわち、**「文中で強勢が置かれるのは、一般に、意味の上で重要と考えられる語であり、特別な意味上の強調のない普通の場合には、内容語に強勢をおき、機能語には強勢をおかない」**という原則です。内容語とは、名詞、指示代名詞、形容詞、本動詞、副詞、疑問詞、そして機能語とは人称代名詞、関係代名詞、冠詞、助動詞およびbe動詞、have動詞、前置詞、接続詞を指します。重要な語には、強勢があるため、強く、はっきり発音され、聞き取りやすいのですが、逆にそれ以外の語は、早く、弱く発音されるため、聞き取りにくいということになります。

4つ目は、**「人称代名詞は一般に強勢をとらない。ただし、他の人との比較、対照において、再度繰り返して用いられる場合には強勢をとることがある。」**というものです。

そして最後の原則は、**「文章の最後にくる前置詞、特に単音節の短い語は普通、強勢をとらない」**というものです。4つ目と5つ目の原則は東後(1977)からの引用とのこと。

## 2. 「リズム読み」とは

「リズム読み」とは、英文を英語らしく読めるようにするために記号研という研究会の会員が長年実践している指導法の一つですが、ある意味においては英語の歌を生徒全員が歌えるようになる魔法の指導法とも言えます。國弘(1984:172~173)では、リズムの習得法について

一つ有効な方法は、FEN放送であれ、ラジオ番組であれ、テープであれ、なんでもかまいません。英語をたえず聞くとともにしに聞くということです。(中略)もうひとつの方法は、英語の歌を聞き、できれば自分で歌ってみることです。英語の歌というのは、個々の単語のアクセントはもとより、リズムや文強勢が正しくないと、まちがいがなく歌えないようなくみになっています。アクセントやリズム、文強勢の面でミスがきかないようになっているといっても

よいでしょう。(中略)これを活用すれば、英語のリズム感を知らず知らずのうちに身につけるうえに、少なからぬ効果があることは疑いありません。そればかりか、英米人の常識の一部を形成しながらも、われわれ日本人にとっては必ずしも常識化していない何かを知ることでもあります。

と言って英語の歌の指導の有効性を説いていますが、残念ながら肝心のどうやったら英語が苦手な私たちが英語の歌を歌えるようになるかが書かれていません。

元岐阜大教授の寺島隆吉先生は、定時制教師時代に、初めは授業成立の対策として歌を取り入れ、すぐに歌えるようにするためには、英文法に対して「英音法」の指導が必要であることに気が付きました。「英音法」とは東後(1977)が「英文法」に対して提案した用語で3つの要素からなり①個々の音②リズム③イントネーションの法則を指します。そこで特にリズムの指導法として生み出されたのが「リズム読み」です。この指導をすると、ほとんどの生徒がすぐに英語の歌が歌えるようになります。私の経験だと、教師の準備は大変ですが、ラップとか早口の英語でも大丈夫です。リズムに乗るように英語を読むには、必ず「音の化学変化」を学びます。これが「英音法」指導の始まりです。音の脱落や連結を無理なくマスターし、しかも「英語の歌を歌えるようになる」という副産物付きで指導できます。

具体的には、まず教師がリズム読み用のプリントを作成しなくてははいけません(資料①)。まず歌詞をワープロで打ち、次に「内容語」の第一アクセントのところの上に□印を付け、それ以外の音節と「機能語」の音節全ての上に○印を小さく付けていきます。次にCDを何度も聴いて、記号が正しいかを確認し、機能語なのに弱いところは□を小さい□に修正し、逆に内容語なのに強く読まれている所は、小さい○を大きい○に修正します。このためには、教師は何度も歌を聞き、「リズム」をまず教師自身が覚え、当たり前ですが歌えるようにならなくてははいけません。次にすべての単語にカタカナで振り仮名をつけていきます。音が脱落するところは( )でくくり、連結して音が代わる場合はUで結んで変わった語をその下に書き込

みます。これでプリントの準備は終了です。もちろん、カタカナなど付けなくても大丈夫な学校も多いかもしれませんが、もしこれが中国語やフランス語だったらフリ仮名のついていないテキストでは、私はやる気ができません。英語が苦手な生徒も同じ感覚だと思って付けてあげることが多いです。

授業ではまず、底辺校の場合はカタカナ読みから初めるのも手です。英語はリピートしたがるなくてもカタカナならかなりよくリピートします。次にボールペンを持たせます。大きな□と○印のところでボールペンで机を叩かせます。その時、叩く場所では呼吸も強く出すように指示します。しかも段々と英語の発音にしていきます。ボールペンで机を叩くリズムは一定になるように、ボールペンを振り上げる間に、弱くよむ語は早めに弱めに読ませます。ボールペンでリズムをとりながら英語を読む。これを「リズム読み」と呼びます。

さて、歌は歌わなくては意味がありません。しかしリズム読みが出来るとなれば、歌を歌うのは簡単です。教師はだんだんとリズム読みしながらメロディーに乗せていきます。そして最終的にはCDの歌と一緒に歌います。

歌で「リズム読み」を導入した後は、教科書の英文やキング牧師、チャップリンの「独裁者」の演説などの感動教材で、一定期間徹底してリズム読みを指導してあげれば、生徒は無理なく次第に英語のリズムに慣れていくように感じます。

### 3. リズム読みと英語らしさ

片山(2008)は、『日本人英語学習者の発音における超分節の特徴と母語話者評価』というタイトルで大変興味深い研究を報告しています。ストレスの要素として「高さ」「長さ」「強さ」をそれぞれ人工的に機械で強調させ、オリジナルの発話と比べ、どちらが英語らしいかをネイティブスピーカー100名に聞いてもらいアンケートをとったのです。

Ladefoged, P. (2001)によれば、聞き手がストレスを聞き手側からの観点で定義することは難しいとされていますが、日本人は主に「高さ」のみを使ってアクセント(ストレス)を作るのに対

して、英語では「強さ」と「長さ」と「高さ」の3つでアクセントを作っているようで、そのことから予測できるように、一番評価が高かったのは「強さ」、次に「長さ」でした。「高さ」を変えた音声ファイルはイントネーションが逆に変わったと答えたネイティブも複数いたようです。また「長さ」についてはリズムが変になってしまうことも指摘されています。結論としては日本人学習者の場合、「強さ」こそが一番の指導のポイントということが言えるということです。ここでいう「強さ」とは「呼吸」のことで、よく「子音は日本語の3倍の息で」などと本で言われているのを耳にしますが、そのこととも関係しているのかもしれない。

この点において、ボールペンを叩きながらその箇所を「強く」読ませる「リズム読み」はとても有効な指導法だと思われます。「叩く」という動作は「強さ」を意識付けさせるには最適だとも思われるからです。

### 4. リズム読みへの疑問に対して

しかしながら、実際の指導においてリズム読みに対する疑問ということではしばしば言われるのが、「リズム読みは少し不自然に聞こえる」かもしれないということです。これは授業において強勢のあるところを少し大ききなくらいに強く読ませる指導から始まる場合が多いからです。しかしこのことに対しての寺島先生は「最初は」不自然なくらいがちょうどいいといえます(寺島 1996, p86-94)。似顔絵を例にすると、似顔絵は写真よりもその人の特徴を大ききなくらいに書くことが特徴ですが、リズム読みもはじめのうちは意識的に多少大ききなくらいにやっけて英語のリズムの特徴を意識させることが目的になります。日本語にないリズムを身につけるには多少大ききなくらいではじめるのがコツという意味だと思います。そんな疑問の声が聞かれた場合は、実際にCDで音声聞かせて「耳に残る単語」を意識させてから、リズム読みプリントに戻れば、その単語に印がついているわけですから、生徒はきっと納得すると思われます。新しいことを受け入れさせるには最初は丁寧に行うことがやはり必要かもしれませんが、それだけの

価値がある指導法だと思います。導入時は大げさなぐらいに強調してあげて、だんだんと CD の音声に近づけていくのが良いと思います。「強く読む」という感覚が最初はとても分かりにくいからです。

## 5. リズム読みとリスニング力の関係

長谷川(2005)は、「机を叩きながら英語を音読する」という訓練方法が、英語のリズムを習得する上で、効果的であるかを調べています。また「文の中で、強音節は聞き取りやすく、弱音節は聞き取りにくい」という事実について、リズムを習得することで、聞き取りにくいとされる弱音節が聞きとりやすくなるのかについても検証しています。実験の対象は、大学生の男女10名でした。テストは、テープから流れてくる簡単な英会話を聞き、会話文の空所を補充する「ディクテーション形式」のテストで、2グループに分けた後、片方のグループにはただの音読の家庭学習を、もう片方にはリズム読みの家庭学習を10日間課しました。10日後にポストテストを実施したところ、リズム読みを行った方が、得点が明らかに高く、また弱音節が聞き取れるようになっていました。さらに2か月後に再びテストを受けさせても結果は同様でした。このことから長谷川は、机を叩くというリズム読みがリスニングに効果があり、さらに少なくともその効果は2か月は続く結論づけています。残念なことに被験者が少ないこと、きちんとした統計を計算していないので、差が統計的に優位かどうかは分かりませんが、私自身も、リズム読みをさせてからのシャドーイングやオーバーラッピング活動は、させない場合よりも生徒の負担は少ないように感じていたので、弱音節に対する気づきには効果があると思っています。リズム読みとリスニング力との関係は近く詳しく調査してみたいと思います。

## 6. リズム読みと英文読解の関係

Kadota(1987)は「韻律論的アプローチ」という仮説を発表しました。これは、「文章の読解過程に音韻符号化にもとづく音韻処理経路が存在しており、それがリズムなどのプロソディに係わる情報を補い、読み手に対し**情報処理単位を形成する重**

**要な手がかりを提供しているのではないか」という論です。「読解単位の形成(フレーズ化)に際してもリズム等の韻律情報が重要な役割を果たしている仮説も可能である。」(門田 2001:221)と言います。はじめはそんな馬鹿なことはあるはずないとも正直思いましたが、私がこのことに興味を持つようになったのは、記号研の複数の会員がネットの掲示板などで、2CP±1単位のフレーズは、読んでいて「気持ち良い」という表現で投稿していたからでした。そこで少しでもこのことを検証できればと思い、2CP±1で実際切られた英文のリズムを調べてみました。(CPとはContent Phraseの略で「内容語Content Wordを1つでも持つ句、すなわち内容語の句のこと。例えば who stand / on the warm threshold は stand , warm, threshold が内容語で who stand と on the warm threshold それぞれが1CP、よって全体で2CPとなりこれを1 sense group とするのが記号研のフレーズの切り方の原則となっています。詳しくは寺島美紀子 2002 : p83 あたりを参照してみてください。)**

この「リズムによるフレーズ化」を検証するためには、ある程度まとまった英文が良いかと思われるので、教材としては有名なキング牧師の『I have a dream』を使用しました。分析にあたっては、寺島美紀子(2002)の「フレーズ分け」と寺島隆吉(1997)の「強弱リズム分析」を使用しました。

寺島美紀子(2002)では英文を全部で338のフレーズに分けてあります。2つのコンテンツフレーズ±1を原則としていてフレーズ化されています。内容語は、普通は強勢が置かれると考え、フレーズ内の強勢の数は2±1ですから「1から3」となるものが多いはず。寺島(2002)のフレーズ分けを、まず寺島(1997)に写し取り実際に強勢の数を調べると結果は次のようになりました。(ただし個人的には4つから6つのものは、もう少し小さく授業では切るだろうなとも思われました。)

- 1つのもの : 43個
- 2つのもの : 138個
- 3つのもの : 110個

4つのもの：38個

5つのもの：8個

6つのもの：1個

ここでフレーズの切れ目を分析すると、切れ目は「強勢のある単語」と「強勢のない単語」の境目であるものがほとんどで、例外は2つでした。

□ □ □ □

例外1) must not lead us / to a distrust of all

□ □

white people

□ □

例外2) black man and white men, /

しかし1つ目の例外は「動詞+人+前置詞句」のよくある形でもあるので、「強勢のある単語の直後でフレーズが切られる」かは、まだその「傾向がある」としか言えないと思われまます。2つ目の例外は、直後にカンマがありますので「切る」のが普通であり、また **white man** は一つの単語としてとらえても問題はなさそうですから、“whiteman” の直後で切れていると考えれば例外とはならないかもしれません。

次にフレーズのはじまりを調べてみました。338個のうちほとんどが「弱」から始まるフレーズでありましたが、51個のフレーズは「強」から始まっていました。内訳は以下のとおりです。

副詞句（ほとんどが文頭） 13個

主語 20個

動詞 2個

分詞 7個

Let us の文が9個。

Let us の形が多いのはこの文章に特有でしょうし、文頭副詞、主語に強勢が置かれるケースも容易に理解できますので、ここでは「動詞と分詞はフレーズの先頭になる場合がある」というのが注目すべき特徴といえると思われまます。最初に述べたフレーズ内の強勢がおかれる数が4つ以上であるケースを見てみますと、例えばリズムの山が3つ続くものを途中で切ると、次のフレーズを動詞

でも分詞でもないのに「強」からはじめることになって、「リズムによるフレーズ化」の原則(?)を乱すこととなります。

具体的には

□ □ □ □

Deeply rooted in the American dream

には4つ「強」の位置がありますが、適当に3つ目で切ることはできません。なぜなら次のフレーズが **dream** で動詞でも副詞でもないからです。このフレーズを途中で「切る」なら次が「弱」で始まる **rooted** と **in** の間ということになります。

以上 **I have a dream** の英文で「リズムによるフレーズ化」という仮説をごく簡単に検証してみました。予想外に「リズムがフレーズ化に影響する」という仮説は的を射ている気がしてきました。そしてこの仮説が支持されるのであれば、記号研が長年提唱している「リズム読み」指導は単に、音読・聴解訓練用の指導法というよりも、直読直解につながる、つまり「チャンキング」の自動化にもつながる今後もっと別の視点からも注目されるべき指導法であるかもしれないと思に至りました。考えてみれば、機能語が、フレーズを作る目印であることと機能語が「弱」になることは当然のことなので今回のレポートは当たり前の事実を述べただけかもしれません。しかし統語処理の「自動化」までを視野に入れた場合、何かしらのヒントを含んでいる気がしてなりません。「自動化」が進む過程で、構文解析のための記号をつける代わりに、心の中での「リズム読み」が統語処理を引き継ぐことも無いとはいえないのではないのでしょうか。

## 7. おわりに

授業での「リズム読み」指導ですが、教科書の進度に縛られがちな進学校では、「初期指導」で数回行うのが現実的かもしれません。それだけだとしても、そういった学校の生徒なら普段の家庭での音読で補えるかもしれません。しかし時間に余裕のある学校では是非、「グループ」による音読テストや歌のテストをお勧めします。グループによ

るリズム読みテストとは、グループ毎に教師の前でボールペンを叩きながら音読するというもので、少しでもボールペンたたきと音読がずれたら「不合格」です。生徒は合格するまで何度でも受験可能です。評価は「All or nothing」で0点か100点です。歌のテストの場合はボールペンたたきなどはもちろん必要ありません。「歌える」にはリズムや音の化学変化は既に身に付いているはずですから。音読が好きな先生方は、音読練習のバリエーションの一つに加えてもらうのもお勧めです。特にシャドーイングの前なら、その後のやりやすさに生徒自身が気がつきやすく、良い動機づけになるかと思えます。プリントを作るのは大変ですが、それだけの価値がある教授法だと思います。

### 8. 参考文献

- Kadota, S. (1987) The role of prosody in silent reading, *Language Sciences* 9:185-206.
- 門田修平 (2001) 『英語リーディングの認知メカニズム』 ころしお出版
- 片山圭巳 (2008) 「日本人英語学習者の発音における超分節の特徴と母語話者評価」. 第34回全国英語教育学会東京研究大会発表予稿集. 126-127. 全国英語教育学会
- 國弘正雄 (1984) 『英語の話し方』 サイマル出版社
- 寺島隆吉 (1996) 『ロックで学ぶ英語のリズム』 あすなろ社  
(1997) 『キングで学ぶ英語のリズム』 あすなろ社  
(2000) 『英語にとって「音声」とは何か』 あすなろ社
- 寺島美紀子 (2002) 『英語「直読直解」への挑戦』 あすなろ社
- 東後勝明 (1977) 『英会話の音法 50』 ジャパンタイムス社
- 長谷川早紀 (2005) 『英語のリズム習得法』 慶応義塾大学人文学部卒業論文
- Ladefoged, P. (2001), *A Course In Phonetics/ Fourth Edition*. Boston: Thomas Learning.

### リズム読みプリント例①

( [http://www42.tok2.com/home/ieas/kigozuke\\_nyumon\\_ch.1.pdf](http://www42.tok2.com/home/ieas/kigozuke_nyumon_ch.1.pdf) )

YESTERDAY <英音法>

1. Yesterday  
イェスタデイ  
All my troubles seemed so far away.  
ネル マイ トラブルズ シームド ソ ファー アウェイ  
Now it looks as though they're here to stay.  
ナウ イット ルックス アズ ムーヴン トゥー ゴン トゥー ステイ  
Oh, I believe in yesterday.  
オウ アイ ビリェフ イン イェスタデイ

2. Suddenly  
サドンリー  
I'm not half the man I used to be.  
アイム ノット ハーフ ザ マン アイ ユーズ トゥー ビー  
There's a shadow hanging over me.  
ゼアズ ア シャドウ ハンギング オーバー ミー  
Oh, yesterday came suddenly.  
オウ イェスタデイ カム サドンリー

3. Why she had to go I don't know.  
ワイ シー ハド トゥー ゴウ アイ ドン't ノウ  
She wouldn't say.  
シー ウドント セイ  
I said something wrong.  
アイ セイド サマシング ヴロング  
Now I long for yesterday.  
ナウ アイ ロング フォー イェスタデイ

4. Yesterday  
イェスタデイ  
Love was such an easy game to play.  
ラヴ ワズ サッチ ア イージー ゲーム トゥー プレイ  
Now I need a place to hide away.  
ナウ アイ ニード ア プレース トゥー ヒド アウェイ  
Oh, I believe in yesterday.  
オウ アイ ビリェフ イン イェスタデイ

### リズム読みプリント例② (ふりがな無し版)

([http://ci.nii.ac.jp/els/110008713244.pdf?id=ART0009790837&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1352273843&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110008713244.pdf?id=ART0009790837&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1352273843&cp=))

In good conscience, we cannot support the administration's civil rights bill, for it is too little, and too late.

The voting section of this bill will not help thousands of black citizens who want to vote. It will not help the citizens of Mississippi, Alabama, and of Georgia, who are prevented from voting in the state elections.

The more we delay in passing this measure, the more we will expose the deep racial hatred that exists in the hearts of thousands of our citizens who are prevented from voting in the state elections.